様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：８４３０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３６８２００３

研究課題名（和文）内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Research on Makie Lacquers Produced in Kyoto: A Survey and Comparative Study of Works in Japan and Abroad

研究代表者
永島　明子（Nagashima, Meiko）

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・その他部局等・主任研究員

研究者番号：９０３２１５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,200,000円

研究成果の概要（和文）：明治維新の社会変動に対する京都の漆器産業の反応を知ることは、現代の漆器産業の行く末にとっても重要な課題であるが、現存する江戸時代の京都製蒔絵と近代の蒔絵の分類は必ずしも明白ではない。本研究は、英仏蘭独西瑞米などの各国と日本の美術館、博物館、個人所蔵家が所蔵する日本の蒔絵作品の中で、コレクションの成立期や制作者のわかっている品を中心に千点あまりをつぶさに調査し、これらを比較することによって、京都製蒔絵における近世と近代の様式の違い、あるいは近代の京都と他地域で作られた蒔絵の違いについて、その特徴を掴むことに努めた。同時に、海外研究者と交流を深め、今後の研究のための情報の集積と人脈の構築を行った。

研究成果の概要（英文）：Understanding the Meiji Restoration’s effects on Kyoto’s makie lacquer industry not only gives us historical insight but also helps us to anticipate the future of today’s declining lacquer industry. But to do so, we first had to clarify the distinctions between makie lacquers made in Kyoto during the Edo period and those made during the modern era. This study, encompassing over 1000 works of Japanese makie from diverse collections in Japan, the U.K., France, Holland, Germany, Spain, Switzerland, and the U.S.A, focuses on works with signatures or accompanying acquisition-related evidence. Through observations and comparisons, this study distinguishes between early modern and modern lacquers, as well as between modern makie lacquers made in Kyoto and those made elsewhere. Another positive outcome of this research has been the fostering of a network of colleagues and collectors around the world, forming the basis for future international cooperation in the study of Japanese lacquer.

研究分野：日本漆工史

キーワード：国際研究者交流　漆　コレクション　蒔絵　明治時代　江戸時代　19世紀　京都

１．研究開始当初の背景

日本から海外に渡った蒔絵に関する研究は、過去 20 年あまりの間に飛躍的に進んだ。これはヨーロッパ統合により各国間の移動や情報交換が活発となって欧州内における研究が進んだこと、日本からの海外渡航や情報入手が容易になったこと、また美術品研究の学際化が進んだことなどによる。

本研究の代表者も 1996 年から 1999 年にかけて英仏独へ赴き、18 世紀フランスの王妃マリー・アントワネットの所有した蒔絵コレクションについて、フランス国内３か所に分かれて伝わる 100 点近い現存作品の詳細な調査と、18 世紀の古目録との照合作業を行い、これに基づいてこの作品群の歴史的位置づけを行い、それまで日本の輸出漆器研究において空白期間であった江戸時代中期の状況に関する様々な視点を論文に発表した（①）。この和文の論文は、それぞれの母国語に翻訳する労をとってくれたヨーロッパの研究者たちによって、フランスやドイツでの展覧会にも活用された（②）。これに前後してヨーロッパにおける歴史上の著名な王侯から地方貴族にいたるまで、様々な漆器コレクションの紹介が相次ぎ、2005 年にはこの分野の先駆的研究者であるイギリスの故オリバー・インピー氏とオランダのクリスチャン・ヨルグ氏が、これを総括する大著を英文で発表した（③）。本書はオランダ東インド会社が残した日本関係文書から、漆器にかかわる記述を集成したシンシア・フィアレイ氏の研究を基にした情報も収録する。日本でも 2001 年に至文堂の『日本の美術』シリーズに輸出漆器が特集されるなど、コレクションの紹介と様式変化や技術的特徴の解説が進み、2008 年には日高薫氏が輸出漆器の表現上の問題を日本美術史の枠組みで捉える研究を著わした（④）。

本研究の代表者は 2008 年にそれまでの調査と研究交流による人脈を活かし、スウェーデン王室をはじめとする海外所蔵者から名品を借用して、輸出漆器の特別展覧会を企画実現した（⑤）。

本展は、世界でも初めての輸出漆器を特集する大型展となり、広く一般の観覧者に実物によって輸出漆器の魅力を伝え、その通史の把握を可能とするものであった。また、在外コレクションと日本の伝世品や史料の双方をつきあわせることによって、国内の伝世品のみではわからなかった江戸時代中期の京都の町なかの生産品の実態を明示することができた。ただ、資料集積が及ばず近代を迎えた京都の蒔絵生産がどのように変化するかを扱うことができなかった。そこで、本研究により、その点を含めた通史を描き出すことを目指し、4 年間で可能な限り実作品や関連史料の調査研究を積み重ねたいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、海外のコレクションを含む蒔絵の伝世品を詳細に調査・撮影し、そのデータを、既知の作品と比較し、実物に即し、また伝世の経緯を物語る史料を研究することによって、未だ不明瞭な江戸時代の作品と明治以降の作品との違いや、京都とそれ以外の地域の蒔絵の差異を見極めることであり、京都の蒔絵生産の歴史的な展開を捉えることであった。同時に、海外の所蔵者や研究者との交流を深め、将来の共同研究の在り方を探ることも目的とした。

研究代表者はこれまで、京都の古社寺が伝えてきた漆器の名品を調査する機会に恵まれてきた。京都の古社寺は、平安時代から江戸時代までの国内の富裕層のために作られた品を豊富に伝えるが、京都の蒔絵の歴史を捉えるには不十分であると考えられる。それは、これまでの研究から、国外へ輸出された蒔絵の物量が、蒔絵産業を支えるに看過できない規模であり、その質的な工夫も国内の作品とは異なるものを含んでいたこと、また、海外に保管されている蒔絵は、コレクション成立の年代を確定しうる文献史料をともなう場合が多く、京都の蒔絵の時代的変遷を追うのにまたとない研究対象であることがわかっているためである。さらには、明治維新によって京都の手工業が重要な顧客層を急激に失って衰退を始めた一方で、廃仏毀釈などで勢力を失った京都の古寺が当時の作品をほとんど伝えていないことも目の当たりにしてきたからである。そのため、この時期になお懸命に制作に取り組んだ蒔絵師たちの仕事を確かめるには、海外のコレクションを調査することが必須となる。

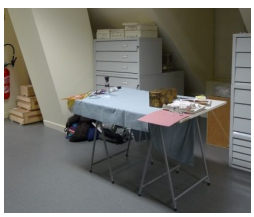
本研究では、特に国外に伝世する江戸時代から近代にかけての蒔絵作品のうち、制作時期や作者の判明している作品や成立経緯のわかるコレクションに重点を置き、できるかぎり多くの例を調査し、近代を迎えた京都の蒔絵産業がどのような変化を辿ったかをとらえることを目標とした。また、この研究を通じ、今後の国際研究交流の基盤を固めることも重要な目的のひとつと位置づけた。

３．研究の方法

本研究では、まとまった研究費がなければ実現できない海外調査に重点を置き、主に 19 世紀以降に蒐集された蒔絵コレクションを対象に詳細な実地調査を行い、作品データの蓄積とその分析を行った。具体的には、作品の観察記録を文字情報として蓄積し、採寸を行い、作品の姿写真、展開写真、各面の写真、部分拡大写真、顕微鏡写真を撮影し、これを整理した。調査対象は、主にヨーロッパの美

術館に保管されている蒔絵作品であり、万国博覧会に出陳されたことがわかっている作品や、蒐集家の活動期や没年から、制作年の下限が抑えられる作品を探した。作品それ自体の特質もさることながら、これを享受した人々の蒔絵に対する評価や、販売に携わった人々の活動に関する資料もできる限り集めた。研究代表者の本務による国内調査を除き、4年間に実現した調査の内容は以下のとおりである。

(1) ドイツ、ゴータ・フリーデンシュタイン城美術館における明治政府が初の国賓に贈った蒔絵作品並びに画帖
(2) スイス、ジュネーヴ、バウアー・コレクションにおける明治・大正期に蒐集され制作者や販売者が判明している作品を中心とした優品数十点
(3) スイス、ジュネーヴ市立民族学博物館に収蔵される 18～19 世紀の貴族のコレクションから数点
(4) オランダ、個人宅における明治～昭和初期の作者の明確な優品十数点
(5) オランダ、アムステルダム国立博物館（ライクス・ミュージアム）における 17 世紀以降の東西交流の中で生まれた蒔絵を中心とする美術工芸品数十点
(6) 東京国立博物館における白山松哉の作品を中心とした蒔絵数点
(7) 東京藝術大学美術館における白山松哉作品と関連資料
(8) 都内某美術館における白山松哉とその弟子たちによる蒔絵作品と関連資料数十点
(9) 京都市内個人所蔵の蝶形卓
(10) 白鶴美術館における古代の蝶形卓と近代の奈良漆器による写し
(11) アメリカ、ボストン美術館における 19～20 世紀のビゲローや岡倉天心らが収集した蒔絵作品数十点と六角紫水による未刊の蒔絵図録原稿
(12) アメリカ、ボストン、ハーヴァード大学美術館における蒔絵作品数十点
(13) フランス、コンピエーニュ、アントワーヌ・ヴィヴネル美術館における 19 世紀のテュイジー侯爵が蒐集した蒔絵コレクション数百点



挿図①② アントワーヌ・ヴィヴネル美術館　調査風景

(14) フランス、パリ、ルーヴル美術館におけるティエール大統領が 19 世紀半ばに収集した蒔絵作品数十点
(15) フランス、ディジョン美術館で最近発見された 18 世紀の模造漆パネルや蒔絵パネルの象嵌を行っていた工房の部材ストック数十点
(16) スペイン、マドリッド、国立装飾美術館における南蛮漆器数点（展覧会の見学にて南蛮漆器数十点）
(17) スペイン、マドリッド、個人宅に伝わる 20 世紀初頭の蒔絵作品数点
(18) スペイン、マドリッド、古美術商の店舗が所蔵する南蛮漆器数点
(19) イギリス、ロンドン、V&A 美術館における 19 世紀末から 20 世紀初頭に収集された蒔絵作品百数十件
(20) イギリス、ロンドン、V&A 家具修復部門において蒔絵象嵌作品等、数点
(21) フランス、パリ、装飾美術館における 19 世紀末から 20 世紀初頭に蒐集された蒔絵作品数十件
(22) フランス、パリ、ルーヴル修復工房にてマリー・アントワネットのために作られたパネル象嵌家具の部材一点
(23) フランス、パリ、個人経営の修復工房にて 20 世紀の作品を中心に数点

４．研究成果

19 世紀前半までに国外に輸出された上質の蒔絵のほとんどは京都製である可能性が極めて高く、実際に木地の作り方、文様の傾向、顕微鏡で観察する細部の技法のどれをとっても、共通する特質を持っている。それは、素地と下地の軽やかさと正確さ、まるで当たりまえのように仕上げられた均質な塗りと研ぎ、何気なく描かれたように見える手慣れた文様、ともすれば「ゆるい」とか「野暮ったい」などと形容されかねない「抜け感のある」図柄を描きながら全体をバランス良く収めた画面、ものとしてさりげなく、扱っていて気持ちのよい点などである。この基準からはみ出す作品は、近代以降の作品であるか京都製ではない可能性を考えることができる。

このたびスイスのバウアー・コレクションと東京国立博物館、東京藝術大学美術館、都内某美術館における白山松哉とその門下の仕事をまとめて観察する機会を得て、京都の蒔絵の特質とは異なる幕末近代の江戸東京における精緻な蒔絵の優品の基準点を見いだすことができた。それは、顕微鏡でのぞかなければわからないほど細かな筆遣い、油絵のように色漆を混ぜる方法、技法の複雑な組み合わせ、完璧を目指す緊張感のある装飾、蒔絵粉

の大きさまでを揃えようとする緻密さなどである。その視点に基づき、また収集の経緯を考慮すると、アメリカのボストン美術館のコレクションは、東京方面の収集品が多く収蔵されていると推察された。

近代以降の作品は、往々にして器物の形が鋭敏であり、文様が作りこまれて充填的となる傾向があり、それまでの絵付けのルールとは異なって、器物の底裏や印籠蓋造りの立ち上りに精緻な蒔絵を施したり、器物の形に関わりなく表面に図案を貼り付けるように描いたりする。また「浜物」などと通称される、輸出用に安く、しかし豪華に見えるように作られた蒔絵作品は、素地も下地も厚く作られるか、反対に粗末な下地に金泥のような消粉蒔絵で作られることも多かったようである。もちろん京都でも粗雑な品を作った場合もあったはずであり、その点を見極めるのは今後の課題といえる。

一方、オランダで現代において蒐集された個人コレクションには、近代京都の漆芸家たちが署名した作品があり、これらを顕微鏡でのぞくと、江戸東京のような複雑な新技法が観られることはなく、反対に従来通りの伝統技法が密度と精度を高めて施されており、蒔絵師たちが手持ちの技術で精一杯、新しい漆器を作り出そうとした努力が伝わってくるようであった。

これに対し、ヨーロッパ特にフランスの 19 世紀以降のコレクションは、18 世紀以前に京都で作られ海外へ輸出された小品を多く含んでいる。これはフランス革命による王侯貴族のコレクションの散逸と新興ブルジョワによるコレクションの再編成という特殊事情が作用したと思われるが、日本の開国を待たずに相当量の江戸時代の京都製漆器が市場に流通していたようすを垣間見ることができた。

コンピエーニュのアントワーヌ・ヴィヴネル美術館が収蔵するテュイジー侯爵の数百点にのぼる蒔絵の小箱コレクションや、19 世紀の富豪たちによるいくつかの大型寄附で成り立っているパリ装飾美術館の蒔絵コレクションなどは、その構成がよく似ており、本研究の調査によって、両館の学芸員たちが相手のコレクションに興味を持ち、将来の共同の展覧会を模索する動きも生じてきた。

パリ装飾美術館では同館の学芸員もほとんど見ることがなかった漆器の調査であったため、立ち会った学芸員たちの質問を多く受けながらの調査となり、反対に 19 世紀から 20 世紀の蒐集家たちに関するさまざまな情報を教えていただき、大いに研究交流を果たすことができた。本研究の調査内容はフランス語でも記録され、先方の台帳情報に役立てられることになっている。また、同館の漆器コレクションを活用した展覧会を企画しないかとの提案も受け、引き続き連絡を取り合い、情報交換に努めることになった。

挿図③　パリ装飾美術館　調査風景

ルーヴル美術館のティエール大統領の東洋美術のコレクションについては、23 年度に本研究によって日本へ招聘したオルセー美術館名誉学芸員ジュヌヴィエーヴ・ラカンブル氏と、その教え子であり 24 年度に本研究で招聘したルーヴル学院博士課程の今井朋氏による情報提供に基づき、特にこのコレクションの成立過程を仏文の修士論文にまとめた今井氏の全面的な協力を得て、同コレクションの一部にあたる数十点の蒔絵コレクションの全貌と、19 世紀中期のパリにおける蒔絵作品の市場状況について論文にまとめることができた（〔雑誌論文〕の項参照）。

ディジョン美術館では、本研究で調査に訪れる数年前に、ラカンブル氏の訪問をきっかけに 18 世紀の煙草入れや白粉箱を作っていたと想像される工房の材料ストックが発見されていた。このストックは、小箱の表面に貼るための小さな板の集積で、表面の装飾は、日本の蒔絵、中国の漆絵箔絵、フランスのヴェルニ・マルタン（模造漆）と多様であるが、漆芸を専門とする研究員がほとんどいないフランスの地方美術館においては、その分類が難しいため作品登録を保留していた。実際には漆芸を専門とする日本の研究者数名が観察しても意見が分かれるような微妙な出来映えの小板が多く、本研究においても顕微鏡での観察やほかのコレクションに含まれるヴェルニ・マルタンとの比較を通じてようやくおおよその判定を行えたのであるが、この研究成果は論文「十八世紀フランスの蒔絵熱：蒔絵層の剥ぎ取りと高度な模造の実例集」としてまとめた（〔雑誌論文〕の項参照）。

イギリスでは、幕末から明治の万国博覧会に関わる品々を含め、膨大な蒔絵コレクションを誇る V&A 美術館の調査において、当時、近代の京漆器に関する特別展を準備中であった京都国立近代美術館の学芸員の中尾優衣氏を本研究の調査の一部に同行することを先方に認めていただき、中尾氏と意見を交換しな

がら作業を分担して、効率のよい調査を行うことができた。同時にこの展覧会への協力を果たすこともできた（〔その他〕の項参照）。

ドイツのゴータ・フリーデンシュタイン城美術館では、明治政府が初の国賓として迎えたイギリス王子（両親であるヴィクトリア女王とアルバート公はともにゴータゆかりの出自）、エディンバラ公アルフレッドに贈った品々を調査し、蒔絵作品のみならず、幕末近代に活躍した画家たちの合作である 10 冊揃いの画帖についても詳しく調査を行い、帰国後、絵画の研究者である水谷亜希氏の協力を得て、明治新政府の文化外交に関する論文をまとめることができた（〔雑誌論文〕の項参照）。

いずれの調査においても、作品管理を担当する学芸員をはじめ、現地の研究者たちとさまざまな情報交換を行うことができたが、これに加え、本研究では年にひとりの在外研究者を招聘し、日本における情報収集の便宜を図ると同時に様々な情報を提供していただき、研究交流を充実させることができた。招聘実績は以下の通りである。

23 年度：オルセー美術館名誉学芸員ジュヌヴィエーヴ・ラカンブル氏。ジャポニスム研究の草分けであり、フランスの国公立美術館が所蔵する蒔絵を集めた展覧会をも実現したラカンブル氏から、19 世紀パリにおける日本美術の収集動向に関する豊富な知識を直接講義していただいた。当時、鶴見大学教授であった加藤寛氏の協力のもとラカンブル氏に蒔絵を体験していただくこともできた。フランスで入手が必要な資料の収集に協力してくださるとのことだったので、モナコ王室に伝わるマザラン侯爵家関係の資料について依頼した結果、アーカイヴ研究を最も得意とする同氏にとってもこのテーマが重要な研究対象となった。

24 年度：ルーヴル学院博士課程（当時）　今井朋氏。ラカンブル氏の教え子であり、フランス大統領アドルフ・ティエールの東洋趣味のコレクションについて修士論文をまとめたばかりであった今井氏には、京都における情報収集の便宜を図り、反対にティエール・コレクションに関する様々な情報を提供していただいた。ルーヴルやコンピエーニュでの調査にも一部同行の上、調書の口述筆記などの協力もいただいたと同時に、漆器の調査方法を伝授することもできた。

25 年度：（先方の都合により 26 年度に繰り越し）パリ装飾美術館主任学芸員アンヌ・フォレ・キャルリエ氏。17 世紀、18 世紀のフランス美術工芸を担当するフォレ・キャルリエ氏には、日本において、蒔絵の品がどのように作られ、どのような場所で使われ保存されてきたかを知っていただきたく、幕末から続く大阪の商家、京都の杉本家、角屋保存会、金沢の蒔絵師や古美術商の協力を得て、密度の濃い日本文化研修を体験していただくことができた。同氏はフランスの伝統的な模造漆であるヴェルニ・マルタンに関する大型展覧会を実現したばかりでもあり、この分野の数少ない専門家として、その知識を日本の研究者、漆芸従事者、一般聴衆に分けていただくべく、国際研究セミナーの開催にご協力いただいた。（〔学会発表〕参照）。

26 年度：V&A 美術館学芸員ジュリア・ハット氏。V&A の膨大で質の高い漆芸コレクションを担当するハット氏とは、ご本人の要望に従い、日本においては珍しく最高級の近代美術工芸の収集に専念している清水三年坂美術館と当時近代美術の展覧会を開催中であった MOA 美術館を見学した。短い滞在であったが、当時、京都国立博物館で開催中であった名品ギャラリーの「南蛮漆器と紅毛漆器」展と「江戸時代の蒔絵」展（いずれも研究代表者による企画）の見学も実現し、17 世紀の特注の輸出漆器に関わる情報交換や、25、26 年度に行った V&A での調査内容について意見交換を行うことができた。

以上のように、当初の目的のとおり本研究によって多くの作品情報を収集することができ、幕末近代の京都における蒔絵生産の変化に関するイメージを具体的に持つことができた。未発表であるが、特に、ある形状の蒔絵粉については、これが認められるときには江戸東京方面の仕事と断定できる可能性が見えてきたため、今後、収集したデータの分析の精度を高めて検証したいと考えている。また、ここに全てを報告することはできなかったが海外調査の対応をしてくださった各担当者をはじめ、日本の蒔絵に興味を持つ在外研究者が少なからずいることを再確認し、今後も交流を通じて互いの研究を深めて行けるものと確信することができた。

＜引用文献＞

①永島明子「江戸時代中期の輸出漆器―マリー・アントワネットのコレクションを中心に―」『漆工史』22 号　漆工史学会　1999 年。

②Kopplin, Monika. Les laques du Japon Collections de Marie-Antoinette, Réunion des musées nationaux, Paris, 2001.

③Impey, Oliver, and Christiaan Jörg. Japanese Export Lacquer 1580-1850. Hotei Publishing, Amsterdam, 2005.

④日高薫『異国の表象―近世輸出漆器の創造力―』ブリュッケ　2008 年.

⑤京都国立博物館編『japan 蒔絵―宮殿を飾る　東洋の燦めき―』読売新聞大阪本社

2008 年。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①永島明子「十八世紀フランスの蒔絵熱: 蒔絵層の剥ぎ取りと高度な模造の実例集」『学叢』35 号、京都国立博物館編、2013 年：pp.19-24 および 107-132。
②永島明子、水谷亜希「ゴータ・フリーデンシュタイン城美術館蔵画帖:明治政府よりエディンバラ公アルフレッドへの贈答品」『学叢』35 号、京都国立博物館編、2013 年：pp.5-16 および 51-86。
③永島明子「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ティエール（一七九七～一八七七）蒔絵コレクション」『学叢』36 号、京都国立博物館編、2014 年 5 月：pp.10-20 および 69-98。

〔学会発表〕（計　２件）

①永島明子「日本製蒔絵の輸出に関する基礎知識」京都国立博物館主催、美術史学会後援、国際交流セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」、於　京都国立博物館 平成知新館 B1F 講堂、2015 年 1 月 25 日開催。
②アンヌ・フォレ・キャルリエ「ヴェルニ・マルタン：フランスの ≪漆芸≫」京都国立博物館主催、美術史学会後援、国際交流セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」、於　京都国立博物館 平成知新館 B1F 講堂、2015 年 1 月 25 日開催。

〔その他〕

①永島明子「作品と向き合う喜びと苦悩」『京博のいい話　研究員エッセー』36、毎日新聞朝刊、2012 年 10 月 11 日
②永島明子「京漆器の来し方」京都国立近代美術館ニュース『視る』473 号、京都国立近代美術館、2015 年 2 月 16 日

６．研究組織

(1)研究代表者
永島　明子　（NAGASHIMA MEIKO）
京都国立博物館・学芸部・主任研究員
研究者番号：90321554

(2)研究分担者（0）

(3)連携協力者（0）